

# 学内広報

2003. 5. 14  
 東京大学広報委員会

## 春の紫綬褒章受章、記者会見行われる



紫綬褒章受賞、記者会見風景

(2 ページに関連記事)

### 目次

特別記事 .....	2	キャンパスニュース .....	9
春の紫綬褒章受章、記者会見行われる		平成15年度進学指導担当教官決まる	
一般ニュース .....	5	掲示板 .....	11
評議会（4月22日（火））承認事項		第24回東京大学農学部公開セミナー「アジアと農林水産業」、教養学部で第97回オルガン演奏会の開催《楽の音は緑の翼にのって》、「教養学部報」第465（5月7日）号の発行、第30回医科研シンポジウムの開催について、第6回人工物工学コロキウムー共創工学の展開ー	
部局ニュース .....	6	事務連絡（人事異動（教官）） .....	14
医学部附属病院がSARS対策と災害・テロ対策の院内説明会を実施、近藤次郎名誉教授文化勲章受章記念講演会、外国人留学生のためのガイダンス（新入生歓迎企画）、今井一洋大学院薬学系研究科教授「ゲント大学名誉博士」の称号授与される、新領域創成科学研究科情報生命科学専攻の設置について		訃報（城塚登名誉教授） .....	15
		淡青評論「数学のできる人はどこに行くか？」 .....	16

## ≡ 特別記事 ≡

## 春の紫綬褒章受章、記者会見行われる

室伏旭名誉教授、福山秀敏教授、毛利尚武教授、柴崎正勝教授、坂村健教授の紫綬褒章受章の記者会見が、4月23日（水）に行われた。

## 室伏旭名誉教授

本学大学院農学生命科学研究科名誉教授、現秋田県立大学教授の室伏旭先生が本年度春の紫綬褒章を受章された。

室伏先生は、ジベレリンをはじめとする植物ホルモンに関する研究を中心として、天然物有機化学、生物制御化学の分野における研究・教育に努められ、日本ならびに世界の植物ホルモンに関する化学的、植物生理学的研究ならびに植物生長調節への応用研究の発展に貢献された。さまざまな植物の成長過程、生理現象の発現している部位から多数の植物ホルモンを単離同定された。生長の速いことで知られるタケノコ44トンの煮汁から14mgのジベレリンA<sub>19</sub>を単離構造決定されたことをはじめとして、新たに単離構造決定されたジベレリンの数は20種を超え、ジベレリンの化学、生合成・代謝に関する研究に大きな貢献をされた。

また、これらの植物ホルモンの重水素標識体を調製し、ごく微量の活性物質をGC/MS等の機器分析により同定・定量する手法を開発・改良するとともに、これらの手法を用いてイネの生長過程におけるジベレリン、サイトカイニン、アブシジン酸の動態を明らかにするなど、植物ホルモンの消長と生理現象の関係を解析し、植物生長調節を化学的に裏づける研究を展開し、高い評価を受けている。

(大学院農学生命科学研究科 山口五十磨)



室伏旭名誉教授

## 福山秀敏教授

本学物性研究所前所長である福山秀敏教授が本年度春の紫綬褒章を受章されました。

同教授は電気伝導を典型例とする量子輸送現象の理論的解明を中心にして、固体電子論の発展に多大の貢献をしてきました。同教授は大学院時代に、軌道反磁性磁化率の公式を導き、当時まで長年の謎とされていたビスマスの示す反磁性の説明を与えました。液体ヘリウム上で実現される二次元電子系では、電子間のクーロン相互作用のため結晶化する場合がありますが、このウイグナー結晶の融解の理論を構築しました。また、一次的な有機導体の実験の進展に対応し、一次元電子系が格子振動と結合したパイエルス系の集団励起による伝導について考察し、不純物による位相のピン止めの問題に適用しました。この方法は、位相ハミルトニアンの方法と呼ばれ、電荷密度波・スピン密度波の問題に広く使われています。

電子が不純物ポテンシャルのために伝導性を失うアンダーソン局在の現象は、電子の量子力学的振る舞いの基本に関わる問題として多くの研究者が取り組んできた問題ですが、1970年代に弱局在からのアプローチが確立してその理解が大幅に進展しました。福山教授はアンダーソン局在の問題に対する電子間相互作用の効果を明らかにすることによって、その進展に重要な貢献をしました。銅酸化物高温超伝導体は1986年に発見されましたが、その超伝導機構の解明にも、強相関極限からのアプローチと言う立場で多くの貢献をされています。特にスピンギャップの重要性をいち早く指摘され、理論ばかりでなく実験に対しても指導的立場で研究をされてきました。

(物性研究所 上田和夫)



福山秀敏教授

## 毛利尚武教授

本学大学院工学系研究科精密機械工学専攻の毛利尚武教授が、本年度春の紫綬褒章を受章されました。

今回の受章は、放電加工を主とする精密加工技術の研究において、新しい加工プロセスを開発し、現象の理論的な解明と共に、産学協同により加工法の実用化や加工機械の開発に努めてきた先生の先端的な研究と多大な業績に対して贈られたものです。

放電加工は高硬度材料に対する精密加工法として知られていますが、従来は導電性材料の除去加工が主体でした。これに対して、金属やセラミックスの粉末成形体を電極とした金属上へのセラミックスの堆積加工や、補助電極を用いた絶縁性セラミックスの放電加工を実現し、放電加工に新しい研究・実用分野を開きました。さらに、切削加工と放電加工の複合化を実現し、放電加工によって材料の付与加工（盛り上げ加工）を可能として、除去と付加の最適な組み合わせにより、高速高精度な金型加工の新しい方式を確立しました。これらの研究成果を総合し、実用化を推進するために放電加工機などの多くの加工機械の開発を行い、斬新な加工機械の実現に多大な貢献をされました。これらの新規加工法や精密加工システムなどの研究は、内外で高い評価を受けています。

(大学院工学系研究科 木村文彦)



毛利尚武教授

## 柴崎正勝教授

本学大学院薬学系研究科の柴崎正勝教授が本年度春の紫綬褒章を受章されました。

柴崎教授は、触媒的不斉炭素-炭素結合形成反応の開発と、独自の反応を基盤とした医薬関連化合物の設計、合成の分野において顕著な業績をおさめられております。我々の体はキラルな場であることから、それに作用する医薬品は光学的に純粋な形で供給されることが求められます。しかも世界的な規模での化合物生産を、環境を汚染することなくおこなう必要があります。このような要請に応えられうる方法論が、触媒的不斉合成です。2001年にノーベル化学賞に輝いた野依良治教授の業績が水素の触媒的不斉添加反応であるのに対し、柴崎教授の業績は有機化合物の骨格である炭素-炭素結合形成を促進する不斉触媒の開発であります。柴崎教授は、化学反応が二つの基質間の結合形成であるという極めて根源的な点に着目して、単一不斉触媒が二つの基質の双方を定まった位置で同時に活性化すること（多点認識）ことで従来にはない基質一般性とエナンチオ選択性を発現できることを見いだしました。この概念に基づき、ルイス酸とプレンステッド塩基による活性化を組み合わせた不斉触媒と、ルイス酸とルイス塩基による活性化を組み合わせた不斉触媒を開発しました。前者の不斉触媒は原子効率の優れたニトロアルドール反応、ケトンからの直接的アルドール反応、マイケル反応、エノンのエポキシ化反応等を幅広く促進します。これらの反応のいくつかは、国内外の企業により工業的合成へと展開されております。また後者の不斉触媒は、アルデヒドやケトンの触媒的不斉シアノシリル化反応、ストレッカー型反応、ライセルト型反応を高エナンチオ選択的に促進します。ケトンの実用的な触媒的不斉シアノシリル化および触媒的不斉ライセルト型反応は世界に先駆けた成功例であり、カンプトテシンやオキシブチニンといった世界的に大きな市場を持つ重要医薬品の工業的合成への展開が期待されております。

(大学院薬学系研究科 金井求)



柴崎正勝教授

## 坂村健教授

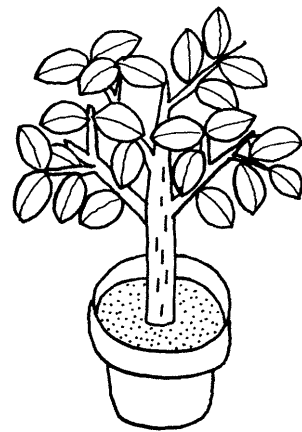
本学大学院情報学環・学際情報学府の坂村健教授が、本年度春の紫綬褒章を受章された。

坂村教授は、1984年よりTRONと名付けた我が国独自の計算機システム体系の構築を果たした。TRONの特徴はまず、システムの軽量化を迫り、更に外部からの割込イベントに対する高応答性を実現したことである。これにより、TRONは携帯電話や情報家電等の機器の軽快な作動を支える基盤となり、我が国の組込システムの約半数、ほとんどの携帯電話端末、ISDN交換機等のOSとなった。次に、小型軽量化を究極化した情報システムの姿として、Ubiquitous Computingのコンセプトを世界で初めて提唱した。これは、今日のIT分野の学術・産業を牽引する理念となっている。更に、TRONの基盤アーキテクチャの設計においては、それが使われる社会や文化との関係性を重視し、例えば、TRON体系におけるPC用OSであるBTRONは、東アジア文化にとって重要な漢字などの文字を100万字以上も扱える多文字処理方式を備えている。また日本人の手の大きさの実計測に基づいたエルゴノミクスキーボードなどの開発にも注力した。更にBTRONでは、身体障害者を支援するインタフェース機能を世界で初めてOSの標準機能とした。文化資産の保存、修復、展示する新しい手法として、ITをフルに活用するDigital Museumのコンセプトを提唱し実現した。

システム体系を構築し普及させるうえではオープンシステム方式をとり、技術仕様はオープン・フリー、その実装は、複数社が自由に行える体制とすることで、世界的にも類を見ない、マルチベンダーの同一仕様OSやマイクロプロセッサ群を多数生み出した。ITRONは数十社、TRONチップは国内主要6社からリリースされた。このTRONチップは半導体産業に多大な影響を与え、現在国内ベンダが生産する32 bit CPUの大半はTRONチップが原点となっている。

以上のように、坂村教授は、多大な学術的功績とともに、我が国のIT分野の産業界に対して多大な貢献をした。

(情報基盤センター 越塚登)



坂村健教授

≡ 一般ニュース ≡

評議会（4月22日（火））承認事項

東京大学における教育職員免許状授与資格の取得に関する規則の一部改正

平成15年4月1日から、教員の免許授与の所要資格を得させるための大学の学部等及び大学院の課程について、新たに課程認定を受けた学部学科（工学部計数工学科）及び研究科専攻（工学系研究科マテリアル工学専攻、情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻・数理情報学専攻・システム情報学専攻・電子情報学専攻・知能機械情報学専攻）があるため、所要の改正が行われた。

附 則

- 1 この規則は、平成15年4月22日から施行し、改正後の東京大学における教育職員免許状授与資格の取得に関する規則の規定は、平成15年4月1日から適用する。
- 2 平成15年3月31日以前に大学に入学した者については、改正後の別表の規定にかかわらず、なお従前の例による。

東京大学医学部附属病院規則の一部改正

平成15年度から特殊診療施設として新たに企画情報運営部、大学病院医療情報ネットワーク研究センター及び臓器移植医療部が設置されたことに伴い所要の改正が行われた。

附 則

この規則は、平成15年4月22日から施行し、改正後の東京大学医学部附属病院規則の規定は、平成15年4月1日から適用する。

東京大学大学院工学系研究科規則の一部改正

東京大学大学院学則の改正に伴い、大学院科目等履修生を工学系研究科に受け入れられるようにするため、所要の改正が行われた。

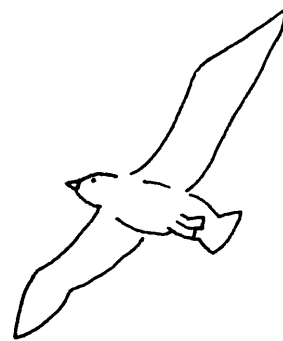
附 則

この規則は、平成15年4月22日から施行し、改正後の東京大学大学院工学系研究科規則の制定は、平成15年4月1日から適用する。

総長特任補佐について

平成15年度総長特任補佐は、次の3名に任命された。  
(平成15年4月1日付け)

- ・小早川光郎教授（大学院法学政治学研究科）  
法規・情報公開担当
- ・黒田 玲子教授（大学院総合文化研究科）  
研究担当
- ・石川 正俊教授（大学院情報理工学系研究科）  
産学連携担当



## ≡ 部局ニュース ≡

### 医学部附属病院がSARS対策と災害・テロ対策の院内説明会を実施

医学部附属病院（永井良三病院長）は、4月18日（金）17時30分からSARS対策と災害・テロ対策の院内説明会を医学部臨床講堂で実施した。

当日は、病院長、事務部長をはじめ、病棟医長、外来医長、看護師など約100名の参加があった。

はじめに、感染制御部からSARS（重症急性呼吸器症候群）対策の内容として、WHO（世界保健機関）感染局長談話（4月11日出典、改変された）により最新情報を提供、発症の特徴、症状、予防策、治療、問題、検査について詳述があり、4月16日にはWHOがジュネーブで記者会見し、SARSの原因はコロナウイルスの新種であると断定、ウイルスは「SARSウイルス」と命名された旨説明された。



感染制御部・森屋講師

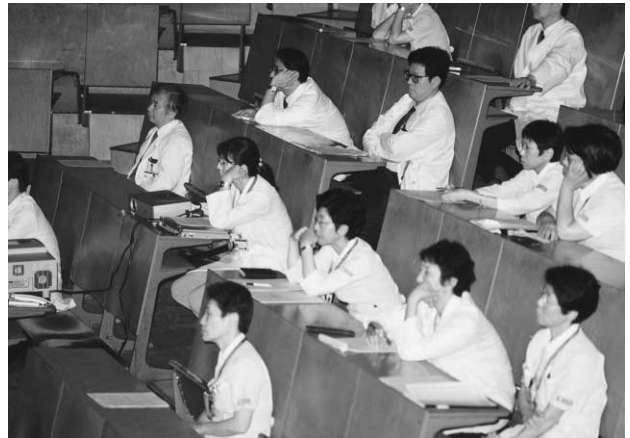
さらに、患者様が来院された場合の対応については、窓口、チェックシート及びマスク着用等の具体的な対策が説明された。

次に救急部から「病院としての災害対策」と題して、災害及びテロ行為に対する基本的な知識、災害及びテロ行為が起こった場合の対応・対策についての説明が行われ、有事に際しての対策に万全を図ることが強調された。



救急部・矢作教授

最後に病院長が、SARSに関してはチェック機能の充実を図り、防災に関しては体制のみならず各個人の防災に対する意識を高めて頂きたいとの挨拶で締めくくった。



熱心に聴き入る医療スタッフ

（医学部附属病院）

### 近藤次郎名誉教授文化勲章受章記念講演会

桜の便りが聞かれはするものの、まだ幾らか寒さの残る快晴の日、平成15年3月10日（月）、安田講堂に於いて東京大学名誉教授近藤次郎先生文化勲章受章記念講演会「今年の桜はいつ頃か～予測理論の発展～」を開催いたしました。入場者はFAXやメールで申し込みを頂いた一般の方が約350名、他に同窓生、教職員学生を含めて、総計約550名でした。因みに一般募集の聴講者の年齢は最年少が13歳、最高齢が88歳、男女比は5対1でした。

近藤次郎先生は「今年の桜はいつ頃か～予測理論の発展～」のご講演中、受章理由でもありますご研究に加えて叙勲にまつわるエピソードなどを時折ユーモアも交えてご披露されました。ご講演終了後に質疑応答もあって予定の時間を多少延長して記念講演会は閉会となりました。



講演を行う近藤次郎名誉教授

（大学院工学系研究科・工学部）

## 外国人留学生のためのガイダンス（新入生歓迎企画）

大学院農学生命科学研究科では、外国人留学生（特に新規入学者、進学者）のために日本での生活（学内外）に必要な手続き、各種生活情報についての説明会（ガイダンス）を以下のとおり実施した。

1. 日 時 平成15年4月21日（月）  
17時30分～19時15分
2. 場 所 農学部弥生講堂一条ホール
3. 参加者 留学生（新入生・在校生合わせて）  
約50名  
研究科長及び関係教官、  
並びに関係事務職員 約15名
4. 内 容

本研究科には約200名（新規入進学者は36名）の外国人留学生がいるが、彼らのためのガイダンスというものをこれまで実施していなかったため、今回は在校生にも参加を呼びかけて実施した。新規入進外国人留学生が多数来日するこの時期に、ガイダンスを行うことで日本での生活をなるべくスムーズにスタート出来るよう考慮したことと、先輩留学生（在校生）と接する機会を設けることで、情報だけでなく人脉（個人ネットワーク）の基礎構築をねらったものである。また、今年度から外国人の留学生担当教官と専任事務補佐員を国際交流室に常駐させるように改善したことを留学生に周知する絶好の機会でもあった。

研究科長、岸野国際交流委員会委員、事務部長の挨拶に続き、国際交流室スタッフや担当事務職員が紹介された。そして引き続き本研究科での必要な手続きや生活する上で必要な情報、便利で有効な情報等についてのガイダンスが国際交流室スタッフから英語と日本語により行われた。その後、参加留学生の自己紹介などで和やかな雰囲気の中、閉会となった。

なお、留学生側から留学生全体の意見や要望を取りまとめ、留学生のための企画を提案するような「留学生会」の設置提案などもあり、このことについては今後国際交流室が留学生全員の意見を確認（e-mailにより）することとなった。

（大学院農学生命科学研究科・農学部）

## 今井一洋大学院薬学系研究科教授「ゲント大学名誉博士」の称号授与される

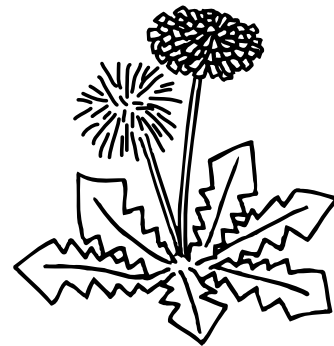
今井一洋教授に3月21日（金）、ベルギーのゲント大学から「名誉博士」の称号が授与された。受章者は今井教授（薬学）の他、Kofi Annan国連事務総長を含む政治学、文学、法律学、医学、獣医学、農学分野の7人であった。授与式は大学の階段式円形講堂にて行われ、各受章者、各令夫人、各国大使館関係者、大学評議員、報道陣など多数列席のなか、賞状・メダルなどがAndre De Leenheer学長より各受章者に贈られた。

今井教授は既に1999年にスペインのマドリッド・コンプルテンセ大学名誉博士号を授与されているが、その後の研究の展開が今回「発光検出を利用する超微量分析法に関する研究」として評価されたものである。



メダルを授与される今井教授（左はゲント大学学長）

（大学院薬学系研究科・薬学部）



## 新領域創成科学研究科情報生命科学専攻の設置について

大学院新領域創成科学研究科では、平成15年4月に情報生命科学専攻が設置され、4月9～11日に入学試験を実施し、修士課程6名・博士後期課程5名の合格者を決定しました。

また、4月25日に情報生命科学専攻だけの入学式を柏キャンパス基盤棟で挙行了しました。

情報生命科学専攻は、バイオ情報科学大講座とバイオシステム科学大講座からなる基幹講座6研究室と2つの協力講座4研究室から構成されます。「情報生命科学」という名称には、生命科学研究の支援や効率化の為の情報技術としてのバイオインフォマティクスのみならず、情報科学的な発想による新しい生命科学研究、つまり生命科学と情報科学の融合を目指す教官一同の思いが込められています。

この分野は、将来の生命科学の中核を担うものですが、今はまだその黎明期にあります。実験系・情報系の枠を越えて、共に学びながら新しい領域の開拓を志す、若く多様な個性の参加を歓迎しています。

平成15年度新領域創成科学研究科入試結果（出願者数・受験者数・合格者数）は下表のとおりです。

## 平成15（2003）年度新領域創成科学研究科 入学試験結果

○修士課程

平成15年4月17日

専攻名	受入 予定 人員	出願者数			受験者数			合格者数			
		合計数	本学	他大学	合計数	本学	他大学	合計数	本学	他大学	
物質系専攻	49	137(1)	43(1)	94	118(1)	42(1)	76	53	30	23	
先端エネルギー工学	13	43	21	22	34	19	15	14	9	5	
基盤情報学	31	119(14)	46(2)	73(12)	90(13)	42(2)	48(11)	41(7)	28(2)	13(5)	
複雑理工学	30	74(2)	21(2)	53	65(2)	21(2)	44	36(2)	20(2)	16	
先端生命科学	60	191(4)	53(1)	138(3)	169(4)	49(1)	120(3)	58(1)	26	32(1)	
環境学（全体）	182	468(22)	131(2)	337(20)	396(20)	107(2)	289(18)	202(10)	76(2)	126(8)	
環境学 専攻	自然環境コース	37	78(3)	8	70(3)	72(3)	7	65(3)	45(1)	7	38(1)
	環境システムコース	27	83(4)	26(1)	57(3)	72(4)	24(1)	48(3)	31(3)	17(1)	14(2)
	人間人工環境コース	50	134(5)	53	81(5)	104(5)	45	59(5)	56(3)	31	25(3)
	社会文化環境コース	41	114(5)	29	85(5)	96(5)	19	77(5)	43(1)	11	32(1)
	国際環境協力コース	27	59(5)	15(1)	44(4)	52(3)	12(1)	40(2)	27(2)	10(1)	17(1)
情報生命科学	24	18(3)	8(2)	10(1)	16(3)	7(2)	9(1)	6(1)	5(1)	1	
合計	389	1050(46)	323(10)	727(36)	888(43)	287(10)	601(33)	410(21)	194(7)	216(14)	

※（ ）内は外国人を表し内数である。（在日外国人を除く）

○博士後期課程

専攻名	受入 予定 人員	出願者数			受験者数			合格者数			
		合計数	本学	他大学	合計数	本学	他大学	合計数	本学	他大学	
物質系専攻	23	17(1)	12	5(1)	17(1)	12	5(1)	14(1)	11	3(1)	
先端エネルギー工学	7	8(1)	6	2(1)	8(1)	6	2(1)	7	6	1	
基盤情報学	14	10(3)	6(1)	4(2)	10(3)	6(1)	4(2)	9(3)	6(1)	3(2)	
複雑理工学	13	13(1)	11	2(1)	13(1)	11	2(1)	11	11	0	
先端生命科学	28	37(3)	30	7(3)	37(3)	30	7(3)	30(1)	27	3(1)	
環境学（全体）	73	71(14)	50(8)	21(6)	69(14)	49(8)	20(6)	51(7)	38(5)	13(2)	
環境学 専攻	自然環境コース	15	12(2)	8	4(2)	12(2)	8	4(2)	12(2)	8	4(2)
	環境システムコース	12	10(3)	8(3)	2	10(3)	8(3)	2	5(1)	4(1)	1
	人間人工環境コース	17	15(2)	11(2)	4	15(2)	11(2)	4	12(2)	8(2)	4
	社会文化環境コース	17	20(4)	15(1)	5(3)	19(4)	14(1)	5(3)	14(1)	13(1)	1
	国際環境協力コース	12	14(3)	8(2)	6(1)	13(3)	8(2)	5(1)	8(1)	5(1)	3(1)
情報生命科学	11	6	3	3	6	3	3	5	3	2	
合計	169	162(23)	118(9)	44(14)	160(23)	117(9)	43(14)	127(12)	102(6)	25(6)	

※（ ）内は外国人を表し内数である。（在日外国人を除く）

※基盤情報学専攻、人間人工環境コース、国際環境協力コースの合格者数には、社会人等特別選抜合格者が含まれる。

（大学院新領域創成科学研究科）



## ≡ キャンパスニュース ≡

## 平成15年度進学指導担当教官決まる

教養学部（前期課程）から専門分野へ進学しようとする学生に対し、進学に関する諸問題について個人的な指導や相談にあたる今年度の進学指導担当教官は、次のとおりである。

## 平成15年度進学指導担当教官名簿

平成15年4月現在

学 部	進学指導担当学科	職 名	氏 名	連絡先（内線）
法	全 類	教 授	馬 場 康 雄	2 3 2 1 9
医	医 学 科	教 授	栗 原 裕 基	2 3 4 9 5
	健 康 科 学 ・ 看 護 学 科	教 授	菅 田 勝 也	2 3 5 2 3
工	土 木 工 学 科	助 教 授	阿 部 雅 人	2 6 0 9 6
	建 築 学 科	助 教 授	西 出 和 彦	2 6 1 6 8
	都 市 工 学 科	教 授	花 木 啓 祐	2 6 2 3 6
	機 械 工 学 科	教 授	中 尾 政 之	2 6 3 6 0
	産 業 機 械 工 学 科	教 授	中 村 仁 彦	2 6 3 7 9
	機 械 情 報 工 学 科	助 教 授	李 家 賢 一	2 6 5 9 5
	航 空 宇 宙 工 学 科	講 師	熊 田 亜 紀 子	2 6 7 2 5
	電 気 工 学 科	助 教 授	苗 村 健	2 6 6 6 8
	電 子 情 報 工 学 科	助 教 授	池 田 誠	2 6 6 6 1
	物 理 工 学 科	教 授	鹿 野 田 一 司	2 6 8 3 0
	計 数 工 学 科	教 授	竹 村 彰 通	2 6 9 4 0
		教 授	満 渕 邦 彦	5452-5251
	マ テ リ ア ル 工 学 科	教 授	鳥 海 明	2 7 1 2 0
	応 用 化 学 科	助 教 授	下 山 淳 一	2 7 7 0 5
	化 学 シ ス テ ム 工 学 科	助 教 授	大 久 保 達 也	2 7 3 4 8
	化 学 生 命 工 学 科	教 授	上 田 卓 也	0471-36-3641
	シ ス テ ム 創 成 学 科	教 授	大 和 裕 幸	2 6 5 1 0
文	全 学 科	助 教 授	鈴 木 淳	2 3 7 8 5
理	数 学 科	助 教 授	長 谷 川 立	(駒場・数理) 4 8 3 3 7
	情 報 科 学 科	教 授	辻 井 潤 一	2 4 0 9 8
	物 理 学 科	教 授	駒 宮 幸 男	2 4 2 0 4
	天 文 学 科	教 授	尾 中 敬	2 4 2 6 1
	地 球 惑 星 物 理 学 科	教 授	星 野 真 弘	2 4 5 8 4
	化 学 科	教 授	塩 谷 光 彦	2 8 0 6 1
	生 物 化 学 科	教 授	西 郷 薫	2 4 4 0 7
	生 物 学 科 ( 動 物 学 )	教 授	岡 良 隆	2 4 4 3 8
	生 物 学 科 ( 植 物 学 )	助 教 授	菊 池 淑 子	2 4 4 6 6
	生 物 学 科 ( 人 類 学 )	教 授	青 木 健 一	2 4 4 8 5
地 学 科 ( 地 質 学 ・ 鉱 物 学 )	教 授	棚 部 一 成	2 4 5 1 9	
地 学 科 ( 地 理 学 )	助 教 授	池 田 安 隆	2 4 5 7 4	
農	一類			
	応用生物学専修	助 教 授	嶋 田 透	2 8 1 3 0
	環境生物学専修	助 教 授	中 園 幹 生	2 5 0 7 4
	緑地環境学専修	助 教 授	恒 川 篤 史	2 5 0 4 9
	生産生物学専修	助 教 授	中 園 幹 生	2 5 0 7 4
	二類			
生命工学専修	助 教 授	堀 内 裕 之	2 5 1 7 0	
生命化学専修	助 教 授	佐 藤 隆 一 郎	2 5 1 2 8	

学 部	進学指導担当学科	職 名	氏 名	連絡先 (内線)	
農	三類 森林生物科学専修 森林環境科学専修 森林資源科学専修	助教授	小 野 良 平	2 5 2 1 8	
	四類 水圏生命科学専修 水圏環境科学専修 水圏生産科学専修	教 授	青 木 一 郎	2 5 3 0 7	
	五類 比較農業・経済学専修 開発政策・経済学専修	教 授 教 授	岩 本 純 明 本 間 正 義	2 5 3 2 6 2 5 3 1 8	
	六類 地域環境工学専修 生物システム工学専修	助教授 助教授	島 田 正 志 芋 生 健 二	2 5 3 4 7 2 5 3 5 9	
	七類 生物材料住科学専修 生物材料開発化学専修	助教授 教 授	磯 貝 明 飯 塚 堯 介	2 5 2 6 1 2 5 5 3 8	
	八類 獣医学専修	助教授	山 内 啓 太 郎	2 5 3 8 7	
	九類 国際開発農学専修	助教授	川 島 博 之	2 7 5 3 4	
	十類 動物生命システム科学専修	助教授	内 藤 邦 彦	2 5 1 9 5	
	経 済	経 済 学 科 経 営 学 科	助教授	柳 川 範 之	2 5 6 0 6
	教 養	超 域 文 化 科 学 科	教 授 助教授 助教授	高 橋 宗 吾 坪 井 栄 治 郎 野 崎 歆	(駒場) 4 6 3 4 7 (駒場) 4 6 2 8 9 (駒場) 4 6 3 8 9
地 域 文 化 研 究 学 科		教 授	高 橋 均	(駒場) 4 6 4 3 6	
総 合 社 会 科 学 科		教 授	大 越 義 久	(駒場) 4 6 4 5 2	
基 礎 科 学 科		教 授	遠 藤 泰 樹	(駒場) 4 6 7 4 8	
広 域 科 学 科		助教授	藤 垣 裕 子	(駒場) 4 6 6 8 0	
		助教授	松 原 宏	(駒場) 4 6 2 5 4	
生 命 ・ 認 知 科 学 科	助教授	松 田 良 一	(駒場) 4 6 6 3 7		
	助教授	丹 野 義 彦	(駒場) 4 6 2 6 5		
教 育	総 合 教 育 科 学 科	助教授	田 中 千 穂 子	2 3 9 4 8	
薬	薬 学 科	教 授	新 井 洋 由	2 4 7 2 0	

備 考：連絡先電話番号

本郷 (ダイヤルイン) 5 8 4 1 - (内線番号の下4ケタ)

駒場 (ダイヤルイン) 5 4 5 4 - (内線番号の下4ケタ)

駒場・数理 (ダイヤルイン) 5 4 6 5 - (内線番号の下4ケタ)

例) 内線 2 〇〇〇〇 の場合 → 5 8 4 1 - 〇〇〇〇

(総務部学務課)

## ≡ 掲示板 ≡

第24回東京大学農学部公開セミナー  
「アジアと農林水産業」

司会：生圏システム学専攻 助教授 恒川 篤史

## 「アジア農業における灌漑の役割」

生物・環境工学専攻

教授 田中 忠次

## 「中国の農業における土壌への塩類集積の問題

とその対策」

アジア生物資源環境研究センター

助教授 高野 哲夫

「東南アジア社会の持続性トリレンマ(人口・食糧・環境)  
の現状とその打破を目指して」

アジア生物資源環境研究センター

教授 飯山 賢治

日時 平成15年6月14日(土) 13時30分～

場所 農学部 弥生講堂一条ホール

東京都文京区弥生1-1-1

地下鉄南北線 「東大前」下車 徒歩1分

地下鉄千代田線 「根津」下車 徒歩7分

対象 一般(どなたでも参加できます)

定員 300名(当日先着順)参加無料

問合せ先 農学系総務課 広報情報処理掛

〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1

電話 03-5841-5484, 8179

主催 大学院農学生命科学研究科・農学部

(大学院農学生命科学研究科・農学部)

教養学部で第97回オルガン演奏会の開催  
《楽の音は緑の翼にのって》

教養学部では、恒例のオルガン演奏会を次のとおり開催いたします。このたびは、世界的に著名なオルガニストであられるコリン・アンドリュウズさんをイギリスからお招きし、18世紀から20世紀に至るオルガン曲の数々をたっぷりとお楽しみいただきます。どうぞご期待下さい。

入場は無料です。ホームページを開設しておりますので、ぜひご覧下さい。

<http://organ.c.u-tokyo.ac.jp/>

日時 5月29日(木) 18時30分開演

場所 教養学部900番教室

曲目 J・A・ギラン

「8つの異なった教会旋法によるマニフィカートのためのオルガン曲集」より「第2旋法の組曲」

J・S・バッハ

「おお人よ、汝の大いなる罪を嘆け」(BWV622)

前奏曲とフーガ ニ長調 (BWV532)

H・ハウエルズ

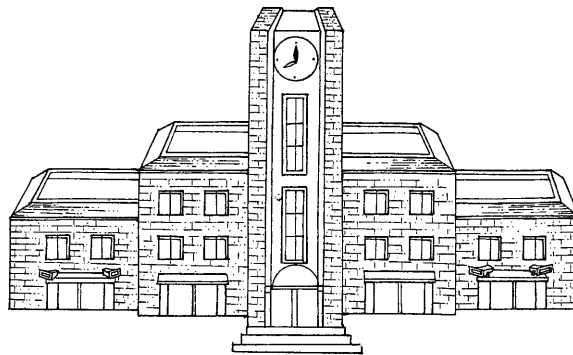
詩篇前奏曲 第一番 (Op.32)

F・リスト

「アド・ノス、アド・サルタレム・ウンダム」による幻想曲とフーガ

オルガン：コリン・アンドリュウズ

(大学院総合文化研究科・教養学部)



「教養学部報」第465（5月7日）号の発行  
——教官による、学生のための学内新聞——

村田純一：哲学を変えるのか、哲学が変えるのか——  
21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター」開設記念シンポジウム

藤井貞和：ことばの杖

〈後期課程案内〉

白井隆一郎：超域文化科学科  
知的スパイラルに抗して  
高橋 均：地域文化研究学科  
あえて危険を冒してふたりの主君に仕える2  
大越義久：総合社会科学科  
社会科学を「横断的に」学ぶ！  
菅原 正：基礎科学科 基礎科学科ってどんな学科？  
荒井良雄：広域科学科 自然・人間・社会  
赤沼宏史：生命・認知科学科  
新世紀の生命科学をめざして

〈本郷各学部案内〉

菅野和夫：法学部 法学部進学予定の皆さんへ  
廣川信隆：医学部 医学部に進学する皆さんへ  
明日の医学・医療をになうパイオニアの養成  
をめざして  
平尾公彦：工学部 21世紀は工学の出番  
河野元昭：文学部 興味こそが力  
阿部 誠：経済学部  
経済学部への招待：数学と実質飛び級  
中田基昭：教育学部  
教育学が変わる、あなたが変わる  
岡村定矩：理学部 理学は何の役に立つか  
會田勝美：農学部 農学は21世紀を拓く  
関水と久：薬学部 ライフサイエンスを志望する諸君へ

鍾 非：経済成長の源泉を考える  
利己心と社会利益の狭間  
臺 快久：教務課／傾向と対策

〈本の棚〉

松原隆一郎：内田隆三著『国土論』

〈私のいち押し〉

松田良一：教養学部生が描いた絵葉書発売

〈理数系辞典案内〉

菊地文雄／川合慧／大築立志／下井守／松田良一

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学生課ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

(大学院総合文化研究科・教養学部)

第30回医科研シンポジウムの開催について

医科学研究所では、恒例の創立記念シンポジウムを以下のとおり開催いたします。(参加無料)

第30回東京大学医科学研究所シンポジウム  
「病原菌の発見からゲノム医科学へ」  
—北里柴三郎生誕150年記念—

日 時 平成15年5月30日(金)  
13時00分～17時00分  
場 所 医科学研究所 講堂

プログラム

開会の辞 山本 雅 所長 13:00～13:10  
司会 伊庭 英夫

1. 「Kitasato's and Behring's legacies 13:10～13:50  
—The Future of Serum Therapy—and of German  
—Japanese Scientific Cooperation」  
Fritz Melchers 教授 (バーゼル大学)

2. 「北里に学ぶ時代と科学」 13:50～14:30  
中村 桂子 館長 (JT生命誌研究館)

休憩 14:30～14:50  
司会 吉田 進昭

3. 「分子の擬態」 14:50～15:30  
中村 義一 教授 (医科研 基礎医科学大部門)

4. 「自然免疫病原体認識機構」 15:30～16:10  
三宅 健介 教授 (医科研 感染・免疫大部門)

5. 「これからの医療に対する基礎医学の立場」  
16:10～16:50  
豊島 久真男 センター長  
(理化学研究所 遺伝子多型研究センター)

閉会の辞 清木 元治 管理系副所長 16:50～17:00

問い合わせ先：医科学研究所 研究助成掛  
電 話 03-5449-5751・5205  
e-mail ken-jo@adm.ims.u-tokyo.ac.jp  
(医科学研究所)

## 第6回人工物工学コロキウム ー共創工学の展開ー

開催日：平成15年5月21日（水）13時00分～17時45分  
 会場：駒場リサーチキャンパス  
 先端科学技術研究センター大講堂（新4号館）  
 主催：人工物工学研究センター  
 共催：大学院工学系研究科・工学部

人工物の設計から消費に至る諸相で行われる様々な意思決定は、複雑化し予測困難な環境下でますます難しくなっています。そのような問題に対して、共創工学は、単独の行動主体のみでは得られない有効解を、行動主体間の相互作用の結果、システム全体として創出する方法論を探求する新しい工学です。行動主体間の相互作用には、人工物と人工物、人と人工物、人と人、組織と組織といった多様な組み合わせがあります。このような共創的意思決定問題の追究により、従来困難であった不完全情報下での人工システムの開発や、人・人工物・環境の発展的な関係の創出などが期待できます。本コロキウムでは、共創工学の理論と実践への展望について、講演、並びに、パネル討論を行います。多数のご参加をお待ちしております。

### ープログラムー

12:00 受付開始  
 13:00～13:15 開会挨拶  
 「コロキウムの開催にあたって」  
 新井民夫（人工物工学研究センター長）  
 ◆講演「共創の理論へ」  
 座長 高橋浩之助教授  
 白山 晋助教授  
 13:15～13:55  
 「共創工学のフレームと方法論」  
 上田完次（人工物工学研究センター教授）  
 13:55～14:35  
 「人と人工物の共創システム」  
 三宅美博（東京工業大学総合理工学研究科助教授）  
 14:35～15:15  
 「経済主体の共創的意志決定」  
 小田宗兵衛（京都産業大学経済学部教授）  
 15:15～15:30 休憩  
 ◆講演「共創の実践へ」  
 座長 藤田豊久教授  
 下村芳樹助教授  
 15:30～16:15  
 「共創のマネージメントー企業における実践」  
 吉田恵吾（本田技研工業株式会社共創フォーラム事務局長）  
 16:15～17:00  
 「産学から社会学連携へーNPO WIN の会」

板生清（新領域創成科学研究科教授）

### ◆パネル討論 「共創の理論と実践」

17:00～17:45

コーディネーター：

黒田あゆみ（人工物工学研究センター客員助教授、NHKチーフアナウンサー）

パネリスト：

岩田修一（前人工物工学研究センター長）  
 及び本コロキウム講師全員

17:45 閉会挨拶

新井民夫（人工物工学研究センター長）

### ◎参加お申し込み・お問合せ先

人工物工学研究センター内

第6回人工物工学コロキウム事務局

担当：上田研究室 大友、羽生

〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1

TEL：03-5453-5887 FAX：03-3467-0648

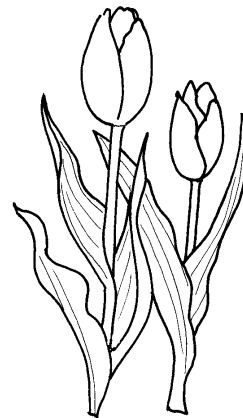
e-mail：mariko@race.u-tokyo.ac.jp

saiko@race.u-tokyo.ac.jp

<http://www.race.u-tokyo.ac.jp/>

参加ご希望の方は、氏名・所属・連絡先を明記の上、上記コロキウム事務局宛にお申し込みください。また、会場定員の都合上、お早めにお申し込みいただけますよう、お願い申し上げます。

（人工物工学研究センター）



## ≡ 事務連絡 ≡

## 人 事 異 動 (教 官)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
		(辞 職)	
15. 4. 30	関 口 真 木	辞 職	宇宙線研究所助教授
		(昇 任)	
15. 4. 16	川 原 信 隆	大学院医学系研究科助教授	医学部講師
〃	鈴 木 英 之	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科助教授
〃	大 島 義 人	環境安全研究センター教授	環境安全研究センター助教授
15. 5. 1	百 瀬 敏 光	大学院医学系研究科助教授	大学院医学系研究科講師
〃	長谷川 哲 也	大学院理学系研究科教授	東京工業大学フロンティア創造共同研究センター助教授
〃	小 林 尚 人	大学院理学系研究科附属天文学教育研究センター助教授	国立天文台ハワイ観測所助手
〃	村 田 昌 之	大学院総合文化研究科教授	岡崎国立共同研究機構統合バイオサイエンスセンター助教授
〃	三 谷 啓 志	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科助教授
〃	武 川 睦 寛	医科学研究所助教授	医科学研究所助手
〃	竹 内 昌 治	生産技術研究所附属マイクロメカトロニクス国際研究センター助教授	生産技術研究所附属マイクロメカトロニクス国際研究センター講師
		(配 置 換)	
15. 5. 1	大 淵 哲 也	大学院法学政治学研究科教授	先端科学技術研究センター教授
〃	染 谷 隆 夫	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター助教授	先端科学技術研究センター助教授
〃	宮 崎 信 之	海洋研究所附属海洋科学国際共同研究センター教授	海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター教授
〃	藤 田 豊 久	人工物工学研究センター教授	大学院工学系研究科教授
		(転 出)	
15. 5. 1	濡 木 理	東京工業大学大学院生命理工学研究科教授	大学院理学系研究科助教授
〃	岸 本 昭	岡山大学教授	生産技術研究所助教授
〃	稲 寺 秀 邦	富山医科薬科大学医学部教授 (公衆衛生学講座)	環境安全研究センター助教授
		(転 入)	
15. 5. 1	高 橋 直 樹	大学院農学生命科学研究科教授	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科教授
		(併 任)	
15. 5. 1	国 包 章 一	大学院工学系研究科附属水環境制御研究センター教授	国立保健医療科学院水道工学部長

## ≡ 訃報 ≡

## 城塚 登 名誉教授

本学名誉教授城塚登先生は、去る4月18日（金）にご病気のためご逝去されました。享年75歳でした。

先生は1951年4月に東京大学文学部哲学科（倫理学専攻）を卒業後、同大学院に進学され、その後、1957年に東京大学教養学部専任講師に着任、1959年に助教授、1969年に教授に昇進されました。ご着任以来、1988年3月に退官されるまで30年の長きにわたって、先生は、社会思想史教室、社会科学科、および1978年（大学院は1983年）に新設された関連社会科学分科（コース）の研究教育の発展に尽力されました。本学退官後は、共立女子大学学長や日本倫理学会会長などの重職を務められ、ご活躍なさいました。

先生のご業績は、何と云っても、若きマルクスの先駆的研究にあります。高校在学中に終戦に遭遇し、混乱した世相の中で、学問とは何か、何のために学問をするのかという根本問題をまずは考えてみたいと、理科から文科に転科された先生は、大学院時代に、精力的に初期マルクスを研究し、処女作『社会主義思想の成立—若きマルクスの歩み』（1955年）を発表して、思想界や学界に大きなインパクトを与えました。マルクス主義や社会主義思想を完成されたものとして教条的に捉えるのではなく、どこまでも、ある社会状況下で形成されたものとして柔軟に捉え、その現代的有効性を考えていくという先生のご研究は、当時の多くの学徒をひきつけましたし、



今なお、学ぶべきものがあるように思われます。また、処女作を発展させて発表された『若きマルクスの思想—社会主義思想の成立』（1970年）では、ご自身が岩波文庫として訳出された『経済学・哲学草稿』の自己疎外論と、『ドイッチェ・イデオロギー』の史的弁証法とを統合する視座を打ち出し、注目されました。

しかし先生のご研究は、マルクス主義や社会主義に限られていたわけでは決してありません。フォイエルバッハやヘーゲルに関する単行本を出されたことや、現象学、実存主義、フランクフルト学派などの現代社会哲学を、弁証法的な観点で受け止め、独自の人間論を展開されたことも、先生の大きな功績と言えるでしょう。その際、特に先生は、自然における人間の位置や身体のあり方に関心を寄せられ、その本来的な姿を現代社会の中でどのように回復するかを研究課題とされました。『新人間主義の哲学—疎外の克服は可能か』（1972年）などの著作は、現代人と共に考えようとするそうした先生の真摯な試みであったと思います。

退官後、駒場キャンパスで毎年催されるベテラン会に度々出席された先生は、いつも和やかな表情で語られ、これからは「自然体の哲学」というテーマと取り組みたいとも語っておられました。このテーマは、まさに先生の哲学的人間論の到達点を示すものと期待しておりましたのに、突然の訃報に接し、残念でなりません。今ここに、謹んで先生のご冥福をお祈り申しあげる次第です。

（大学院総合文化研究科・教養学部）

## 数学のできる人はどこに行くか？

大学教員になって25年強の間に4度の転勤を経験しました。それぞれの場所で貴重な体験をさせて頂きました。しかしながら、とりわけ強く印象に残ったのは、やはり個々の大学より、どの大学にも共通する問題や大学間に関わる問題でした。その一つは次のようなことです。

20数年前の当時は、最初に就職した大学のように、その地域の優れた学生を集める大きな大学では、医学部が他の理系の学部にして良くできる学生を集めていました。今もその傾向が残っていると思いますが、当時は現在よりその差の開きが大きく、例えば1・2年次の数学の期末試験で同じ問題で同じ基準で合否判定をするのは不可能な位大きな差があったように思います。

勿論職業選択は自由ですし人命を救う仕事は疑いも無く大切な仕事です。しかし他方でこの偏りは、医師に対する税制上の優遇措置があって、親が子供たちに強い圧力をかけた結果ともささやかれていたように思います。

私の印象に強く残ったこの体験は、少なくとも多くの数学の教員にとっても紛れない事実で



あったはずですが。個人的には、この「偏り」はその後の様々な学科の新設・再編より大きな「人材の移動」に見え、一つの「社会的な実験」のようにも思え、将来の日本社会に何らかの効果があっても不思議はないようにも思えました。

この元学生であった人たちは、現在40歳前後で、日本の社会の中堅を成しています。かつて数学ができたこの諸氏は、分数計算が誤りなくできるかのみならず、日本の医療の水準向上に寄与されていると思います。

さて数学のできる貴重な人材を奪われた他の分野には、上に述べた「偏り」は何かの変化や結果をもたらしたか、という問いに大変興味があります。

この問題の解答は3種類有り得ます：(A) 大きな社会的な（正または負の？）変化を起こしたことが証拠によって証明できる；(B) 何も大きな変化が無かったことが、証拠によって証明できる；(C) 独断によらずには、実はいずれとも証明する手段がなく、真実は誰にも分からない。

一回限りの事象である歴史には、薬剤の効果判定のような対照実験がありません。どのように証拠立てるか難問のように思えます。読者諸賢のご意見は如何でしょうか？

(大学院数理科学研究科 織田孝幸)

(淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

### ◇広報室からのお知らせ

平成15年度「学内広報」の発行日及び原稿締切日を、東京大学のホームページに掲載しました。

URL: <http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/soumu/soumu/kouhou.htm>

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No 1263

2003年5月14日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail [kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp)

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>